

「そうは言っても、このようなことをする際に、それが遊びごとになってしまったり、他の人々への配慮を忘れたものとなってはなりません。正しいこと、美しいことと思っていることをするのはよいことですが、不必要に目立つことや、他の人々を当惑させることはよくありません。世界は神のもので、そして世界の小さな写し絵であるこの家もあの方のもので、したがって、この家の中でも神の支配が表現されること、神の支配が見える形をとることができる場所を得ることは「相応しく、かつ正しいこと」「ミサ奉献文への叙唱」から」ではあります。けれども、本来の意味での「キリスト教的な場所」とは固定された「物理的」箇所ではなく、人間との間に神が持たれる生き生きとした間柄にもとづいて毎回その都度成立してくるものです。それは現存在の場所であり、神が愛のうちにその心を人間に向け、ご自身の摂理の進行を通して人間に呼び掛けておられるなかで、あの方が人間に対して開いてくださっているものなのです。他方、呼び掛けられている人は自らの信仰をもって、自らの帰依心をもって、自らの服従をもって答えます。この答えがあつた「はい、わたしはここにいます」(サム上三・四)であり、この言葉を通してその人はその聖なる場所に近づいて行くのです——そして、これは人間がどこにいても、とても場所とは言えないような極度に不快な外的環境の中においても、実行することのできるようなのです。

秩序の第三の契機は生活における日常のあらゆる出来事そのものです。かつては、それらの出来事はすべて、意味のある仕来たりという形に表現されていた或る宗教的な意義付けで満ちてい

たものでした。そのうちで今も残っているものは極めて僅かしかありませんし、都会ではもはや殆ど何も残っていません。ですから、ここでも再び、どこまでそれらの名残を見付け出してき、明らかな形態を与えることができるか、或いは場合によっては、新たなものをどこまで自分で見出していくこともできるかということは、個々の信徒一人ひとりに掛かっていることです。

残っている僅かなことに属しているのが食卓での祈りです。ですから、ややこしい事態を引き起こすことなしにそれができるようなら、これはいつも実践すべきです。それも、注意深く、立つたままで、そして良いテキストを用いてです。^(原注)食事というものは、どの民族においても、その揺籃期にあってはひとつの宗教的事象でした。すなわち、食事は神的存在との分かち合いを、そしてそのことのなかで、食べている人々どうしの分かち合いを意味していました。時としては、その痕跡と言える微かな息遣いを実感することがまだできることがあります。それは、一定の状況において成立してくる気分には、明確に何々と表示できる誘因に起因するものではなく、沈み去ってしまった深層に由来しているものがあるからです。単に座して、一緒に食事を楽しみあうためだけに席に着くということと、祈りを通してご馳走を神の手から受け取り、済んだ後ではあの方々に感謝を申し述べるということが別なことであるということは、基本的には誰もが認めていることです。このような食事の後でも、人間的な意味での自然さ、美しさという点では全く何も変わったところがあるわけではありません。けれども、何か新しいもの、何か聖なるものが付け加わって来ているのです。

更に、事情が許すかぎり、母親たちは子供たちと一緒に朝夕の祈りをすべきでありましょう。

それも、日常のあらゆる差し迫った仕事、ありとあらゆる奇立たしい事柄にも拘らず、その祈りが真正の心の統一の一瞬となるような仕方です。母親たちは、世界の中心を意味しているこの小さな共同体の現実が神の前に達するようにと、できるところにしたがって、家族の生活におけるさまざまな出来事、皆の生活の中の喜び、心配事と苦しみをも、この祈りの中に携えてこなければならぬ筈です。このようにしてなされる短い静修の効果はどれほど高く評価しても、評価し尽くすことはできません。

その他にも、もしかすると時には、家庭でのちょっとした信心業の可能性が出てくるというように、うなこともあるかもしれません。そして、この方向に沿ったもので、約束するところの大きい試みも幾つか存在しています。

ついにながら、生活そのものがいつも常にチャンスと要請になっています。幸せな出来事は悲しい出来事とは違う祈りを産み出します。前進と成功の時期は心配と困苦の時期とは別な作用を持っています。病氣と治癒、誕生と死去、生活の中で起こる一切が祈りの中へと携えていかれることを求め、祈りの内容を規定してもいます。ここではわたしたちはもっと繊細な感覚を持たねばなりません——もしかしたら、もっと豊かな独創性を持たないといけない、と言ってもよいのかも知れません。生活のほうはこれ程の多様性を示しつつ祈りの傍らを走り過ぎて行っているというのに、祈りのほうは何時も同じ考え、同じ言葉で行わねばならない筈はありません。わたしたちは、わたしたちの生活の中で起こってくる一切を、上司^{あうじ}か友人のところへ、より正確には、わたしたちの一切を大事と考えてくれている父親のところへ携えていくような気持ちで、神のも

とへと携えて行かねばならない筈です。わたしたちの一切をあの方にお見せし、あの方に感謝し、あの方のもとで光と力を求め探し、あの方に助けを願ひ、あの方のもとで疲れを癒しきらねばならない筈なのです。

祈りの長さについても色々述べねばならないであります。まず何よりも、祈りがスムーズに進行していつて、展開し、内奥における充足にまで達し、そして余韻を残しつつ静かに終わっていくためには、時間を要します。祈りもあまり短くなりすぎますと、さして重要なことではないという刻印を帯びることになります。祈りは敬意をもって遇するに値しないものとなります。個々の行為や考え、言葉は本来の姿にまで十分に展開しきることができないままに、急速に磨耗していくことになります。そして、空虚になってしまったこの行動をその先どちらの方向へ導いていったらよいのか、もはや心にも分からなくなってしまうのです。

他方、本当に大事なことが差し迫っているのはどのような時なのか、或いは、本当の疲れが免責を与えてくれているのはどういふ場合なのか分かること、そして必要な自由を保持し続けることもできねばなりません。とはいえ、尺度のほうをいとも巧みに自分の望みにしたがって操作してしまう術を身につけている、人間の心の狡賢さについて既に述べたことを思い起こすことはよいことです。祈っている時には、時間がなくて、どうしても中断しなくてはならないように見えていたのに、中断した後では、その同じ時間を、一番余計な事のために使ってしまう自分の傾きを、人は我とわが身に繰り返し思い知らされてもいるのです。

の終りにもう一つだけ最後の点を指摘しておきましょう。すなわち、外的な姿勢です。ここでも、祈りの形成と習熟に属していることの多くが崩れ去ってしまっています。かつての時代は姿勢や所作が単なる外的なものに止まるものでないことを知っていました。両方ともそのようなものになることはありえます。ただし、そうなった時には、それらはもう既に腐ってしまっているのです。本当は、どの所作も手から出ていながら、翻って心の中にまで達するものです。そして、身体も姿勢も心情の最内奥に根ざしているものなのです。

姿勢も所作も、内奥で生きているもの、心が実感しているもの、感性が向かっているものを表現するものです——とはいえ、両者はこの内奥の中にまで作用を及ぼし、内奥に支えを与え、内奥に形を与え、躡けることもしています。ですから、どのような体位で祈るかということは、どうでもよいことではありません。もしそれなりの理由が強いるのであれば、どのような仕方の方でもよいでしょう。けれども、自由であるなら、神に対して払うべき敬意を表現している仕方するのがよいです。なぜなら、祈るのは魂だけではなく、人間全体である筈ですから。そのようにするとき、姿勢のほうでも、畏敬の念を保ち、心を統一することができるようにと内奥に手を貸してくれるものです。ここでは誰もが自分にとって為になることは何なのか、自ら見つけだすようにしなければなりません。

祈るということにおける一番重要な姿勢は、今なお、跪くことでしょう。跪くことは、存在している方であり、主でもあるあの方の前における畏敬の念を表現しているとともに、最奥の内奥を真剣にし、心構えのできた状態にしてくれます。ただし、本当に跪くことが必要で、半分寝そ

べったような姿勢になってしまっただけではありません。跪くとは快適さを求めてする姿勢ではなく、躡け、規律を意味する姿勢です。そして、そのための数分間なら当然誰にも実行することのできる筈のものでもあります。真実度を測る尺度としては、収入を得るためになら、あるいはスポーツにおいてなら、どこまで自分にできる筈と期待しているかと自問してみるだけでよいのではないのでしょうか。

祈る際のもうひとつの素晴らしい姿勢は立っていることです。キリスト教の初期はこの姿勢を大変に好んでいたのですが、その後この姿勢は失われてしまいました。この姿勢を新たに発見しなおすことはよいことではないかと思えます。というのは、この姿勢は何か自由なもの、毅然としたものを持っていますし、心構えを、しかも同時に尊厳をも表現していますから、ですから、場合によっては、この姿勢は、重荷に喘いでいる、ないしは気の冴えない時期を乗り越えるための助けとなることができるかもしれません。何を言ったらよいのかは分からないながらも、自分の善意だけは表現したいというような場合にも、この姿勢は為になるかもしれません。少なくとも「こうしてここ、あなたの前にわたしはいます」とは——あるいは「こうしてここ、あの方の前にわたしは立っています」だけであるかもしれません——この姿勢は語っているのです。座していることも、同じように、祈りのひとつの真正の姿勢となります。ただし、背筋を真っ直ぐに伸ばして、精神を集中させた、きちんとしたものであることが必要です。この姿勢は黙想のため、あるいは神のもとに静かに暫し留まっているためには特に適しています。

ここまで挙げてきた全ての姿勢とは対立する形式、即ち、純粹に内的なままに留まり、人々

の真っ直中において、街路において、職業実践のさなかで、仲間との楽しい交流の最中でも、誰にも気付かれることなく採ることのできる形式も、挙げてきた姿勢と全く同じように大切であります。そして、キリスト者が神とのこの聖なる向かい合いを世界の中へと、人間たちのあいだへと担い入れていくとしたら、それは極めて素晴らしいこと、極めて深いことであります。ただ彼は、そこから他の人々に対しても自分自身に対しても何かを作り出そう、見せびらかそうとするようなことだけはしてはなりません。

そもそも、この点はここで話してきた全てのことに当てはまることです。祈りの生活が荒れさみ、その形式が崩れてしまうとすれば、それは残念なことです——けれども、秩序と形式ということも、人が「それらを見せびらかし」たり、それから不自然な物を作り出したるなら、それも同じように残念なことなのです。

所作と特定の宗教的内容とが結びつくと、直ちに聖なる印が成立してきます。たとえば、わたしたちが祈りを始める時と終える時にしているもので、かけがえのない独自の意味を持っている十字の印などです。

このような印にも上で述べたことが当てはまります。すなわち、このような印は信仰の、敬虔な心の、さらには何らかの内的行為の表現であります——と同時に、人間を形作っていくものでもあります。このような印は、個々の人間によってではなく、キリスト教全体によって担われている印であって、新しき創造に属している或る意味形態であり、或る形成権能を持っています。

祈りの準備と秩序

これらの印をする人は、これらの印の聖なる権能のもとに自分を組み入れ、自分をその権能に託しているのです。したがって、これらの聖なる印はどれも、正しく理解し、正しく実行することが大切です。^(原註8)